

舞踊学の動向

理論体系と科学的客観性との総合

—コード重要文献の紹介と解説—

上 林 澄 雄

コード(CORD)とは、アメリカの舞踊学会と云えば早分りの、舞踊研究者の国際的団体(Committee on Research in Dance)の略称。その刊行物には、①1968年発刊の「舞踊研究年鑑(Dance Research Annual)」と；②1969年発刊の「コード、ニュース」と、それを1975年に誌名を改めた「舞踊研究雑誌(Dance Research Journal)」の二種がある。

「舞踊研究雑誌」の内容は、論文、書評、会報その他で、論文の種類は舞踊学のあらゆる分野を網羅している。「舞踊研究年鑑」は、舞踊研究の過去の成果と将来の課題(第1巻)から始まり、舞踊医療法(第二巻)に続いて、舞踊史の一般論(第三巻)とルネサンスからバロック時代までの宮廷舞踊だけに焦点をしばった特殊研究(第四巻)；そして社会学的研究を中心にした論文集(第五巻)に続く文化人類学的研究の一般論(第六巻)およびその特殊研究(第七・八巻)までが現在までに刊行されている。

このように幅広い分野からの数多い研究論文の中から、いったい、どんな基準で重要な文献を選出すれば良いのか？

舞踊学は、①舞踊そのものに関する一般理論の体系と、②その理論体系の実際の適用に関する(訓練法、振付術や舞踊医療、教育舞踊学その他各種の)応用部門とに分たれるが、後者の基礎である前者こそ、より重要なものと思われる。

舞踊研究もまた、①巨視的な全体連関を対象とするものと、②個別的、特殊的に限定された局面を対象として、それを描出、報告、調査、分析する、いわば微視的なものに分つこともできよう。その際、巨視的な全体も微視的な部分も、互いに(特殊によって普遍の妥当性が明らかになり、普遍によって特殊の個性が確かなるような)特殊性と普遍性との間にある弁証法によって関係づけられている。—微視性を欠く巨視的眺望は空虚で、巨視性なしの微視的分析は煩雑で無意味な自己目的に陥るからだ。

とはいえ、アフリカのボッカ地方にあるバカー族の舞踊についての調査報告やボヘミア史のアッホ朝の宮廷舞踊の記録の再現に興味をもつ人がある筈はない(上記の地方名、部族名、王朝名は、みな非存在の虚構だからである)。微視的研究が巨視性を失う例は、巨視的研究が微視性を欠く場合よりも、数多く起ると思われてならない。

してみれば、微視性に立脚した巨視的研究こそ最

も重要な文献として認めざるを得まい。

そこで以下に紹介するコード文献は、舞踊そのものに関しての微視性を失わない巨視的な研究論文を選出することになる。

舞踊の原則の追究

最初に紹介するのは、ヴァレンティナー・リトヴィノフ(Valentina Litvinoff)による「根本原理を求めて(In Search of First Principles)」で「舞踊研究年鑑」第5巻(1973年)所載。

その傍題「民間、民俗および古典の舞踊形式(folk, ethnic, & classical dance forms)における身体運動法(body usages)の比較研究——身体教育(body education)に関する現代の研究を参照し、かつモダンダンスに必要なものを求めての」が示すように、彼女の論考は、①過去の各種の舞踊形式が示す「運動法と運動様式」を根本の対象として；②それを身体運動に関する現代の科学的研究の成果を利用して分析、比較、評価し；③そこから導き出される結論としての身体訓練法・運動技法・様式理解・作舞法を通じて；④「モダンダンス」の向上、発展に役立てることを目的としている。

——ここで注意しておきたいことがある。彼女がモダンダンスと呼ぶものは、近ごろ日本で理解されているそれとは異なることだ。たとえば本誌創刊号所載の片岡康子氏の「モダンダンスの定義」がその好例で、前衛的舞踊を喜ぶ若い批評家や評論家(およびその影響下にある舞踊家)はアメリカ人以上に所謂“ポスト＝モダンダンス”を有意義・有力なものとして誇大視しやすく、モダンダンスを時代遅れの保守的な舞踊として過小評価する傾向が強い。そのようなことを考慮して、ここではモダンダンスを、日本語では“現代舞踊、創作舞踊”と意識すべきであろう。(“創作舞踊”の語は、すべての舞踊が作舞と演舞の両極性を含むが故に、実は不適當なのだが、過去のアメリカや現在の教育舞踊界では、これが、“creative dance”の訳語として、好んで使用されており、それゆえ早分りがするだろうから付記した。)その他の私の訳語も、日本語としての理解を根本の目的として、極度の意識を行った。特に“運動、行動、行為、動作”などに関係する訳語がそうであり、そのほかにも多くの意識を用いたが、その説明は本論の目的を逸れ、多大の紙面を要するが故に、省略する。さて本筋に話を戻し——

リトヴィノフ論文は「現代舞踊は舞踊史の総体を遺産として成立するという前提(the premise that all of dance history is the heritage of modern dance)」に立つもので、それ故に上記①の対象操作には、世界舞踊史、舞踊民族学または舞踊人類学および舞踊民族誌が悉く欠かせない。上記②の現代の科学的研究については、彼女は、キネシオロジーを中

心とする身体教育の各論と舞踊測量法(Choreometrics)に言及するのみだが、私はラバンとその影響下にあるすべての運動理論が不可欠だと思う。さらに上記③の結論は、比較舞踊学、舞踊様式論および舞踊の演技や構成に関する学的な体系を含む舞踊芸術学の各分野を離れては実現できないだろう。上記④の現代舞踊への寄与には、価値判断を含む舞踊測定法(Choreometria)および舞踊美学の体系が必要となるのではないか。

このように考えてみれば、リトヴィノフ論文の包括的な性格が明らかになる。要するに、舞踊学のあるべき体系のすべてのプログラムを網羅する・壮大な構想が、ここに示されている。その細目については、説明の不足や(跳躍時の様式比較におけるアジア舞踊の脚部緊張度の説明に見られるような)誤解も存在するが、それらは瑕瑾として看過したくなるほど、有意義な内容をもつ論文であろう。

原始舞踊の様式と舞踊計量法

次に紹介したいのは、イルムガード・バーテニエフ(Irmgard Bartenieff)の「人類学の研究: 原始社会の舞踊形式(Research in Anthropology: A Study of Dance Style in Primitive Cultures)」で「舞踊研究年鑑」第1巻(1967年)所載。

この論文は歌謡測量法(cantometrics)の方法を基礎的出发点として、それが用いる歌唱時の音声の強弱、声調の緊張、合唱時の統合のパラメーター(媒介変数)の代わりに、ラバンのエフォート、シェーブ理論にもとづく身体運動パラメーターを用いての、舞踊様式の比較論である。

それは経済学的・社会的に見て対照的な世界の代表的な社会文化における舞踊と日常行動を撮影した映画を用い、その身体運動の分析計量から、①歌謡計量法による様式圏は舞踊の様式圏の分布と一致、②歌謡と同様に舞踊も社会組織の複雑化の度合および生産経済の基盤の変化によって様式を決定、③舞踊は日常生活での行動法と同一または様式化された再現であり、一定社会文化の存続を維持し、強化する機能をはたすことが発見されたと云う。

さらに彼女の論文は、エスキモーとポリネシアの身体運動を示す映画200種を見て、分析測量にふさわしい50種を選び、両者の舞踊様式を次のように規定する:

1) エスキモーは定位置姿勢(attitude)が単一; 体力を強く激しく急速に使い; 空間使用に方向意識を伴い; 四肢の全部分を同時に使用して最大の迫力を出し; 労働作業の運動は鋭角的; すべての競技は速力と体力を強調。

2) ポリネシア人は二種の定位置の基本姿勢を示し; 直線運動を避け、中庸の速度を用い、力を瞬間的に発揮しない傾向が強く; 空間意識は不定形; 四

肢は継起的に(順次に波及するように)動かされ、決して衝撃的でなく; 舞踊は波の動きの様式をもつ。(以上の結論が概括的で不十分なことは後に指摘批判された。)

この論文の刊行の翌年に当る1968年に、彼女は自分の方法に舞踊測量法(choreometrics)の名を与えた。

ところが、それ以前の1965年に、より優れた舞踊計測法を用いて、より精密で明快な結論を出した論文があったのである。それが:

ヨーロッパとアフリカとの民間舞踊比較論

(発音がよく分らないが)ジョアン・ケアリノホモク(Joann Kealiinohomoku)の「アフリカと米国との黒人の身体運動の構造連関における舞踊の比較研究(A Comparative Study of Dance as a Constellation of Motor Behaviors Among African & United States Negroes)」——「舞踊研究年鑑」第7巻(1976年)。

この論文で用いられた方法は、空間、時間、様式のパラメーターをもつ身体運動を、アフリカ、アイルランド、スコットランドの民間舞踊およびアメリカ黒人の舞踊についての文献・写真・映画・直接観察によって、総計144種の「特徴」を選定し、その特徴を指摘した文献に出る言及の頻出度(回数)および彼女じしんが直接・間接に目撃看取した回数合計による数量化を基礎としている。

その結論である発見事項は数多く詳細であるが、もっとも巨視的な身体運動のアフリカ様式とヨーロッパ様式との比較対照について、その一部をここに示しておきたい。——その際、簡略を志してアフリカ様式を“ア様式”または“アフ”; ヨーロッパ様式を“ヨ様式”または“ヨロ”と略記する:

1) 空間パラメーターからの計測によれば——個人空間では: ヨ様式は鉛直線を根幹とするが、ア様式は胴部前傾・胴上半部後屈(sway-back)・臀部後方突出を示し「水平的(horizontal); 外部空間の使用では: ヨロは足部の変化だけが複雑だが、アフは全身の変化が複雑で、空間形成はヨロの左右相称に対しアフは左右非相称; 空間の高低度(levels)は: ヨ様式は身長より高く範囲が狭少だが、ア様式は跳躍時以外は身長より低いとはいえ、全体的には高低度の変化が顕著; 集団舞踊での各個人の配置(group space)は: ヨロの事前決定に対し、アフは不定形; その他。

2) 時間パラメーターについては——演技時間は: ヨ様式は短く、ア様式は長い; 拍子は: ヨロが三拍子、アフが二拍子; リズム運動は: ヨロが単純、アフが極度に複雑。

3) 様式的パラメーターでは——姿勢において: ヨロは垂直的で、四肢は曲線的、体重は親指の付け根のふくらみで上方へ支持されるが、アフは前傾し、四肢は鋭角的または伸ばしきり、体重は蹠の全部で低く支持; 運動の発端は: ヨロの四肢が胴体から独

立して動くのに対し、アフの動きは胸部から始まり；運動の分節度(articulation)は：ヨロが明瞭で体位変化は直接的だが、アフは関節の振りや回転を用い、体位変化は迂回的；筋肉緊張度(dynamics)は：ヨロが強く、アフが弱い；またヨロ様式は振付に忠実だが、アフ様式は即興的；演者の感情は：ヨロでは非個性的だが、アフは個性を発揮；観客に対するアピール(projection)は：ヨロが演技を見せて演者を見せず、個性の伝達を欠くのに対し、アフではソロイストの自己展示から内面性表出までの幅がある。

以上にあげた以外に、数多くの重要な記載があるが、紙面に限度があり、省略せざるをえない。しかし古典バレエと欧州民間舞踊との相互関係や黒人ジャズダンスの様式を規定する上に、ケアリノホモク論文は必須の参考文献として見のがされぬものだろう。

舞踊測定法の精密化

理論体系の中心となる仮説の実証のために必要な、数量化の方法は、どの程度までの物理学的数量化を用いるべきものか？

これに答えるための参考に役立つと思われるジュディ・ヴァン・ザイル(Judy van Zile)の「重要な舞踊様式要素としての使用エネルギー(Energy Use: An Important Stylistic Element in Dance)」で「舞踊研究年鑑第8巻(1977年)所載。

この論文が舞踊様式の一構成要素として指適するエネルギーは、筋肉の収縮をグラフ用紙の上に波として視覚化する筋電気記録装置(electromyography)で客観的に数量化される・演舞者の筋収縮をもたらす力である。これを彼女はジャワ、朝鮮、日本の舞楽について考え、類似の運動におけるエネルギー量の大小の差が様式決定に関係があること；静止時のエネルギーの大小；身体部分におけるエネルギーの空間的分布や舞踊演技におけるエネルギーの時間的配列などが、様式決定上、無視できないものではないかと述べる。

その説明は十分に納得できるが、筋電気装置の記録だけに頼ることは(彼女も間接的に言及しているように)様式特性を示すほかに、被験者の生理的状态や個性による差異をも示し、そのため不要および不適當な情報データが加わることになるのではなかろうか？

このように考えてくると、舞踊測定法における物理的計量には限界があり、あまりにも精密な客観的数量は却って測定の総合的価値を歪めるものかと思われる。

水は温度の数的変化によって固体→液体→気体という質的变化を起す。そのように質的变化は、根底には数量的変化があるのだが、その量の変化ばかりに物理的客観性があると思うのは、芸術や文化の事

象における質の差異という科学的客観性を見落すことになると思う。

この意味で、私が本誌の創刊号に発表した舞踊測定法(choreometria)は、すべて数量的な客観性をもつ質的差異を、数量ではない度合の順位による五段階に記号化したもので、それによって理論形成に伴なう主観的恣意による誤謬と数量的表現に内在する情報過多と(各種の解釈が可能な多様性による)曖昧性とが避けられたと思っている。

すでに早くもコードの第一回大会(1967年)でのパトリシア・ロウ(Patricia A Rowe)は、1901年から1967年までのアメリカの大学での舞踊研究を総括して「研究題材はテストや計測調査報告(tests & measurements)だけを主体とすることから離れてきた」(舞踊研究年鑑第1巻)と云っている。現在から将来にかけての舞踊学の大勢や動向は、以上に述べた文献が採用したような、微視的な科学的方法論と巨視的な理論体系の構築とが程よく釣合った研究に向ってゆくものではなかろうか。